

デカルトにおける Ego の問題と存在論の無

今井悠介(東京大学)

デカルト哲学には、「存在論の無」と呼ばれる特徴がある。これは J.-L. マリオンによって指摘され、名付けられものであるが、形而上学の古来よりの対象、「存在としての存在(ens inquantum ens)」を、デカルトは自身の哲学の中で扱わない。この「存在としての存在」への無関心、あるいは暗黙の内での自身の哲学からの排除が、「存在論の無」と呼ばれる事態である。この事態は、この「存在としての存在」を主要な対象として扱いながら、伝統的な「形而上学(metaphysica)」や「第一哲学(prima philosophia)」とは区別された固有な学問として発展を遂げ、後にヴォルフによって「一般存在論」と名指され、体系化され完成されることになる、近世的「存在論(ontologia)」が、ティンブラー、ゴクレンウス、カロフやクラウベルクといった、主にドイツやオランダのプロテスタント的土壌を背景に持つ近世スコラ哲学者達によってまさにデカルトの同時代に産声を上げていたということと極めて対照的である。この近世的「存在論」は、伝統的な形而上学の内に含まれる二重性、すなわち、学の主題・対象としての「存在としての存在」の解釈として、最も卓越した存在者をその探究の対象とするのか、それとも最も普遍的な存在者を対象とするのか、という学の対象に関する二重性の内、普遍性の方向へと進展していったものである。すなわち存在を何か特定の観点からではなく、存在である限りでの存在一般として、その最も普遍的な性格から、存在を対象として探求する学問である。これは、最も卓越した存在者を対象とする学である神学等と区別され、例えばヴォルフが全ての学の基礎にこの存在論を据えたように、ドイツ学校形而上学において独特の発展を遂げた。

このデカルト哲学の「存在論の無」、すなわち「存在論」的思考への無知、いや、より正確には徹底的な無視は、デカルトの形而上学の根幹に由来するものであろうか。あるいは、伝統的スコラ哲学の多くの概念を葬り、また同時に他の多くの概念を独自の意味に転用し、いわば換骨奪胎することで「新哲学」を作り出したデカルトの所作の、単なる一つにすぎないものなのだろうか。本発表は、このデカルトにおける「存在論の無」を、「存在」概念、および「存在としての存在」概念に関する真剣な考察の欠如、あるいは「存在」を単に「実在(existentia)」と同一視してしまう種の素朴さ、と消極的に解釈するのではなく、デカルトが「第二省察」において展開した「私はある、私は実在する(Ego sum, ego existo)」(ATVII, 25)という、いわゆるコギトを第一原理に据えてその形而上学の体系をつくった帰結であると仮に考えたい。その理由として、近世的「存在論」との体系上の対照的な相違がある。近世的存在論、例えば「存在論」という意味のタイトルを持つ著作を哲学史上初めて著し、近世的「存在論」の歴史において大きな役割を果たしたとされる、近世スコラ哲学者であり、デカルト主義者でもあるクラウベルクの著『オントソフィア』は、その形而上学が扱う第一の対象として、思考可能なもの、つまり「知解可能なもの(intelligibile)」、「思惟可能なもの(cogitabile)」を考察するが、この「思惟(cogitatio)」という概念はデカルトと共通していながら、その思惟を行う主体である私(Ego)について扱う議論をほとんど持たない。方法的懐疑によって一旦すべてのものが疑われ、いわば一人称的な世界で自己の存在を見出し、思惟、そして観念という場を見出すデカルト哲学とは異なり、クラウベル

クの『オントソフィア』は最も一般的、普遍的な存在者として、無は思考可能であるという事実から無すら含むような最も普遍的な存在者としての「知解可能なもの」を、伝統的形而上学の「存在としての存在」と重ね合わせながら、見出す。そしてその存在者の様々な特性を、超越範疇や様々なカテゴリーの分析を通して明らかにし、存在一般の学的な知を得ようという試みとして近世的「存在論」を特徴付けることができる。形而上学の出発点に Ego を据え、「存在としての存在」を哲学の領野から排除するデカルトの哲学と、Ego を据えずに「存在としての存在」を第一の対象に据える近世的「存在論」とは、この点で鋭い対立をなしている。この対立は、このデカルト哲学と近世的「存在論」とが、共に伝統的な形而上学の革新の試みとして、とりわけ思惟、知解可能性に着目し、いわば認識論的な観点から旧来の形而上学に新たな光を当てようとする試みとして共に捉えることができるだけよりいっそう、興味深い対立だと思われる。

本発表は、この対立に対して、デカルトの側から光を当ててみようという試み、それによってデカルトの形而上学のいくつかの重要な側面について明らかにしようというものである。すなわち、デカルトの哲学の出発点、第一原理としての Ego の議論を分析することで、また、Ego が第一のものとして体系の出発点に据えられる理由である、「順序正しく哲学する」(ATVIII, 7)ということを考察することによって、「存在論の無」、すなわち「存在としての存在」の排除が、デカルトの体系上必然的にもたらされざるをえないものなのか、それとも単にデカルトがこれらの概念を用いることを嫌ったにすぎず、体系構成上の必然性はないものなのか、このことを明らかにしたい。すなわち「存在論の無」が、単に歴史的にデカルトがそのような選択をしたという事実的なものにすぎないのか、「存在としての存在」とデカルト哲学は本来は共存可能なものなのか、それとも互いに必然的に排除し合うものなのか、この問いを導きの糸としつつ、Ego と「存在としての存在」と形而上学の体系構成について、『省察』、および『哲学原理』等のデカルトの主要なテキストを分析しつつ、現代のデカルト解釈、とりわけマリオンの解釈等を批判的に検討することで考察したい。まず最初に扱う予定であるのは、デカルトの Ego の体系上の位置についてである。問いは、果たして Ego は範例的な存在者であるのか、である。例えば、マリオンは Ego から実体性など存在者の主要な諸属性が演繹されるという解釈を行うが、近世的「存在論」が最も普遍的な存在者として範例的な存在者である「知解可能なもの」の諸特性を考察することによって存在一般に妥当する普遍的な特性を導こうとする、いわば超越論的な関心を持っているのに対し、デカルトの形而上学は Ego をいわば範例的な存在者としてみなし、存在一般に妥当するような特性の導出を行うのであろうか。そのような解釈を示唆するようなテキストもあるし、また反対に Ego を「出発点」とするデカルトの意図は、そのようないわば超越論的な関心でないと思わせるようなテキストもまた存在する。デカルトの Ego は、近世的「存在論」の「存在としての存在」の位置にいわばそのまま置き換わるようなものなのか。Ego が可能にする思考相互の認識における順序関係、また Ego が第一のものとしてそもそも指定されることになった由来である「順序正しく哲学する」こと、この順序の思想と形而上学の体系構成の関係も考察しつつ、以上のような問いに答えることを試みる。